

自殺の起因分析；孤独感に着目して

1170433 清水 優子

高知工科大学マネジメント学部

1. 序論

我が国の一年間における自殺者数は、3万4427人をピークとし年々減少傾向にあるが、依然として年間2万4025人もの人々が自殺している(平成28年度自殺対策白書 厚生労働省)。中でも、若者における自殺問題は深刻である。15歳から39歳までの死因の主要項目は自殺であり、とりわけ大学生の自殺数は低いとは言えない。

自殺研究にも様々なものがあるが、古典的に重要な研究の一つに社会学者のデュルケームの『自殺論』(宮島喬訳 1985)がある。この研究では統計的なデータをもとに自殺の社会的な背景について社会学的に分析している。しかし、若者の自殺分析には社会学的な分析よりも、むしろ心理学における社会排斥に注目することが有用ではないかと考えられる。本研究では、交流を拒絶されたりとか、仲間外れにされたりする社会排斥に着目し、自殺が生じる要因について検討する。

自殺と社会排斥とりわけ孤独に関する研究は数多くされている。大学生における「ひとりの時間」と孤独感・対人恐怖心性との関連(海野ら, 2010)では、人間同士は理解・共感できないと考えている人ほど、ひとりで過ごすことに「孤独・不安」の感情・評価が高いことが示された。21年間の調査からみた大学生の自殺の特徴と危険因子(内田, 2010)では、孤独に引きこもる学生に自殺傾向が高い傾向が見られるという報告がなされている。これらの研究から、ひとりで孤独に過ごすことが若者の自殺率を高めるひとつの重要な要因になっていると考えられるだろう。

では、孤独という状態は常に若者の自殺企図あるいは自殺念慮を高めるのだろうか。孤独が「ひとりでいる状態」を意味するならば、必ずしもそうとは限らないだろう。身の回りの観察でも、他者と一緒に作業を好む人もいれば、逆にひとり黙々と作業をすることを好む人もいる。あるいは、自分の考えや感じ方を整理したい時なども、あえて他の人から離れてひとりになることを希望することもあるだろう。こうした意味での「孤独」もまた自殺企図や自殺念慮を高めるのかどうかは疑わしい。そこで本研究では、特に性格特性の面から孤独を好む人と孤独を嫌う人を弁別した上で、それらの人々

がどのような状況で自殺につながるようなネガティブな感情状態を発生させるのかを検討する。具体的には、自らが選択して孤独になった場合と、他者の選択によって孤独にさせられた場合を比較することとした。

2. 本研究の目的

孤独に対する感じ方の性格の中でも、『孤独にさせられたくない人』、つまり孤独が嫌な人と、『あえて孤独でいたい人』つまり孤独を好む人の2パターンの性格があると考えられる。これら2パターンの性格の持ち主は「他者から孤独にさせられた」という状況と、「自ら選んで孤独になった」という状況とでは、それぞれ異なった感情反応を生じさせるのではないか。本研究の目的は「孤独に関する個人差特性が、孤独を生み出す状況によって、どういう反応を引き起こすか」を解明するというものである。

仮説1：孤独を嫌う性格特性の高い人は低い人と比べて、強制的に孤独にさせられた場合に、自発的に孤独になった場合よりも、よりネガティブな感情反応を示すだろう。

仮説2：孤独を好む性格特性の高い人は低い人と比べて、自発的に孤独になった場合に、強制的に孤独にさせられた場合よりも顕著にネガティブな反応を低下させるだろう。

本研究では親和動機尺度の拒否不安得点が高いほど、孤独を嫌う性格特性が高いと判断し、対人的疎外感尺度の得点が低いほど孤独を好む性格特性が高いと判断することとした。

3. 方法

3.1 調査対象者

2016年10月に実施し、質問紙配布対象者は、大学生116名(男性56名、女性60名)であった。参加者は実験室に集まり、数十分ほどの質問用紙に回答し、報酬を受け取り退室した。調査は3日間に分けて行った。

3.2 質問紙の構成

質問紙は大きく分けて状況シナリオ、性格尺度、うつ傾向、

デモグラフィック項目という4つのセクションで構成されていた。

3. 3 状況シナリオ

状況シナリオでは、自分が選択して孤独になった状況と、他の人の選択によって孤独になった状況を参加者に提示した上で、その場面で感じるであろう感情を回答させた。まず、二つの状況に共通する状況設定として、3人グループを作って課題を行う授業を想起させた。課題は、3人で三分の一ずつ手分けしてやっても、全員で一冊読んで話し合いながらやっても、どちらの方法でも課題を実施していいとされていた。その上で、孤独を選択した状況（以下、自発的孤独と表記する）では、『あなたは他の2人に対して、「私が一人で三分の一をやってくるから、あなたたち二人で残りをやってくるね。」と提案』した。他者から孤独にさせられた状況（以下、強制的孤独とする）では、『この課題の進め方を話し合っているとき、あなたは他の2人から「私たちが三分の二やってくるから、あなたは残りの三分の一やってくるね。」と提案』された。上記のいずれかの状況を読んだ上で、参加者はその時に感じると思われる感情の程度を回答した。感情の項目は The Positive and Negative Affect Schedule[PANAS] (川人, 2011) の20項目のうち「活気のある」「熱狂した」「興味がある」を除いた17項目を用いた。この17項目には、「誇らしい」、「強気」などのポジティブ反応、「恐れた」、「うろたえた」などネガティブ反応が含まれていた。また、「神経質な」、「機敏な」などはダミー項目として採用した。これらの項目に対して、「1: そういう気分にはならないだろう」「2: あまりそういう気分にはならないだろう」「3: どちらともいえない」「4: ややそういう気分になるだろう」「5: そういう気分になるだろう」の5件法で参加者は回答した。参加者は孤独にさせられた状況あるいは孤独を選択した状況のいずれかに回答した後、もう一方の状況にも回答した。どちらを先に回答するかは参加者間でランダムに配置された。

3. 4 性格尺度

性格分類尺度は2つの尺度を使用した。一つに、親和動機尺度（拒否不安）（杉浦, 2000）であり、もう一つは、対人的疎外感尺度（杉浦, 2000）である。

親和動機尺度（拒否不安）では、「仲間から浮いているように見られたくない」や「どんな時でも相手の機嫌を損ねたく

ない」など9項目を「1: あてはまらない」「2: あまりあてはまらない」「3: どちらともいえない」「4: ややあてはまる」「5: あてはまる」の5件法で回答した。これら9項目を合計し、得点が高いものを拒否不安が高い性格であるとした。

対人的疎外感尺度では、「自分の居場所がないように感じる」や「私は一人ぼっちであると感じる事がよくある」といった20項目を「1: あてはまらない」「2: あまりあてはまらない」「3: どちらともいえない」「4: ややあてはまる」「5: あてはまる」回答させた（このうち4項目が逆転項目である）。これら、20項目を合計し、得点が高いものを対人的疎外感が高い性格であるとした。

3. 5 うつ尺度

うつ傾向も測定するため、本研究では、Beck Depression Inventory:BDIを採用した。BDIは、ベックらによって開発され (Beck et al., 1961;1979)、林ら (1988a;1991) によって日本語版が作成させている。使用した尺度には全部で21項目あり、それぞれの項目に対して4つの選択肢が設けられ、その中から、最近一週間の自らの気分が一番よくあてはまる答えを回答させた。例えば、a「0: 私は落ち込んでいない」「1: 私は落ち込んでいる」「2: 私はいつも落ち込んでいるから急に元気にはなれない」「3: 私はとてもがまんができないほど落ち込んでいるし不幸だ」b「0: 私の将来について特に失望していない」「1: 私の将来について失望している」「2: 私の将来に期待するものはない」「3: 私の将来には希望が持てないし、物事はよくなると思う」である。21項目の合計得点を算出し、得点が高いほどうつ傾向が高いということにした。

3. 6 デモグラフィック項目

質問紙の最後で、住まい環境、1日に直接話す人数、1日に間接的に話す人数、年齢、学年、学部、性別を回答させた。住まい環境では、現在自分が住んでいる環境を「実家」「寮」「一人暮らし」「その他」のいずれかから選択させた。1日に直接話す人数では、平日に、大学やプライベートで5分以上話す人数を質問し、「1: 0人」「2: 1人」「3: 6~9人」「4: 10人以上」のいずれかを選択した。1日に間接的に話す人数では、日常的には顔を合わせたりしない中で、メールやSNSで個人的に連絡を取る人数は何名かを質問し、あてはまる人数を自由記述させた。ただし、LINEグループ会話などの大勢が閲覧してやり取りできるものは除き、あくまで一対一の

やり取りの人数を回答させた。年齢、学年、学部は自由記述、性別に関しては男女のいずれかを選ばせた。

4. 結果

全てのデータは HAD を用いて統計分析を行った（清水，2016）。

ポジティブ反応、ネガティブ反応、それぞれに関して、2つのシナリオそれぞれでの値を用いた因子分析（最尤法、プロクラステス）を行った。結果はあまり一貫しなかったが解釈の容易さを考慮し、ポジティブに関しては「誇らしい」「興奮した」「強気な」「決心した」「やる気が湧いた」の項目の平均値、ネガティブ反応に関しは「恐れた」「苦悩した」「怯えた」「うろたえた」「恥ずかしい」の項目の平均値を用いることにした。

シナリオ別・親和動機（拒否不安）の高低とポジティブ反応感情得点を図1に示す。ポジティブ反応を従属変数とし、シナリオと親和動機（拒否不安）の高低を独立変数とした分散分析の結果、シナリオの主効果は有意であった（ $F(1, 114) = 42.80, p < .05$ 偏 $\eta^2 = .27$ ）。親和動機（拒否不安）の主効果は有意であった。（ $F(1, 114) = 6.33, p < .05$ 偏 $\eta^2 = .05$ ）シナリオと親和動機（拒否不安）の交互作用効果は有意ではなかった。（ $F(1, 114) = 0.88, n.s.,$ 偏 $\eta^2 = .01$ ）。

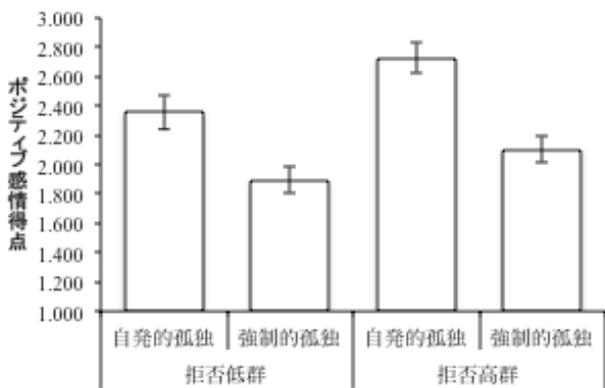


図1：シナリオ別・親和動機（拒否不安）の高低とポジティブ反応感情得点

シナリオ別・対人疎外感の高低とポジティブ反応感情得点を図2に示す。ポジティブ反応を従属変数とし、シナリオと対人的疎外感の高低を独立変数とした分散分析の結果、シナリオの主効果は有意であった。（ $F(1, 114) = 42.50, p < .05$

偏 $\eta^2 = .27$ ）対人的疎外感の主効果は有意ではなかった。（ $F(1, 114) = 3.07, n.s.,$ 偏 $\eta^2 = .27$ ）シナリオと対人疎外感の交互作用効果は有意ではなかった。（ $F(1, 114) = .03, n.s.,$ 偏 $\eta^2 = .00$ ）

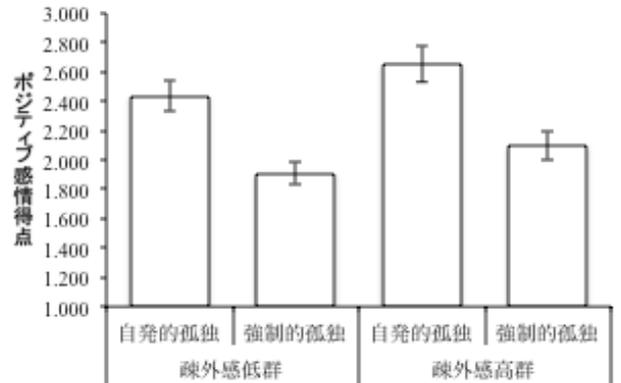


図2：シナリオ別・対人疎外感の高低とポジティブ反応感情得点

シナリオ別・親和動機（拒否不安）の高低とネガティブ反応感情得点を図3に示す。ネガティブ反応を従属変数とし、シナリオと親和動機（拒否不安）の高低を独立変数とした分散分析の結果、シナリオの主効果は有意であった（ $F(1, 114) = 21.28, p < .05$ 偏 $\eta^2 = .18$ ）。親和動機（拒否不安）の効果は有意ではなかった（ $F(1, 114) = 3.58, n.s.,$ 偏 $\eta^2 = .03$ ）。シナリオと親和動機（拒否不安）の交互作用効果は有意ではなかった（ $F(1, 114) = .01, n.s.,$ 偏 $\eta^2 = .00$ ）。

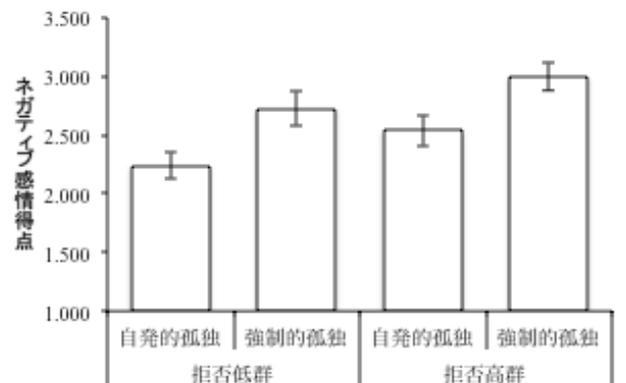


図3：シナリオ別・親和動機（拒否不安）の高低とネガティブ反応感情得点

シナリオ別・対人疎外感の高低とネガティブ反応感情得点を図4に示す。ネガティブ反応を従属変数とし、シナリオと

対人的疎外感の高低を独立変数とした分散分析の結果、シナリオの主効果は有意であった。 $(F(1, 114) = 22.20, p < .05$ 偏 $\eta^2 = .16)$ 対人的疎外感尺度は有意ではなかった。 $(F(1, 114) = 3.11, n. s.,$ 偏 $\eta^2 = .03)$ シナリオと対人疎外感尺度の交互作用効果は有意ではなかった $(F(1, 114) = 2.39, n. s.,$ 偏 $\eta^2 = .02)$ 。

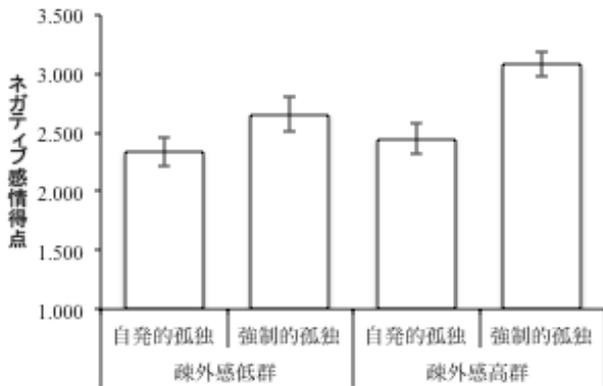


図 4：シナリオ別・対人疎外感の高低とネガティブ反応感情得点

ポジティブ反応とネガティブ反応を従属変数とし、シナリオと性格を独立変数で分析した結果、全ての分析で有意な交互作用効果は見られなかった。シナリオ別の平均値を見ると自発的孤独の時よりも、強制的孤独の時の方が、一貫してポジティブ反応は下がり、ネガティブ反応が上がるのがわかった。

仮説の前提として、性格尺度と各シナリオにおけるポジティブ・ネガティブ感情反応との相関関係が想定されていた。すなわち、対人疎外感尺度得点が自発的シナリオでのポジティブ得点と負相関、ネガティブ得点と正相関すると予測された。また、拒否不安得点はシナリオに関わらず、ポジティブ得点とは正相関、ネガティブ得点とは負相関すると予測された。これらの予測を検証した相関分析の結果を表 1 に示す。結果、対人疎外感得点は自発的孤独の状況では有意な相関が見られず、強制的孤独のポジティブ反応にのみ有意な相関がみられた。一方、拒否不安得点では、自発的孤独のポジティブ反応と強制的孤独のネガティブ反応で、有意な相関が見られた。以上から、性格特性と各シナリオでの感情反応は、拒否不安と強制的孤独のネガティブ反応で予測通りの正相関を示したが、他は予測通りの相関パターンを示さなかった。予

測と異なり、対人疎外感と強制的孤独のネガティブ反応で正相関、拒否不安と自発的孤独のポジティブ反応で正相関が見られた。

	Aネガ	Aポジ	Bネガ	Bポジ	疎外	拒否
Aネガ	1.000					
Aポジ	.003	1.000				
Bネガ	.384 **	.275 **	1.000			
Bポジ	.168 *	.340 **	-.012	1.000		
疎外	.090	.073	.235 *	.060	1.000	
拒否	.027	.209 *	.201 *	-.052	.199 *	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 1 シナリオ別、性格尺度別、感情別の相関分析

(A は自発的孤独シナリオ、B は強制的シナリオを指し、ポジはポジティブ得点、ネガはネガティブ得点を指す。)

考察

本研究では、「仮説 1：孤独を嫌う性格特性の高い人は低い人と比べて、強制的に孤独にさせられた場合に、自発的に孤独になった場合よりも、よりネガティブな感情反応を示すだろう。仮説 2：孤独を好む性格特性の高い人は低い人と比べて、自発的に孤独になった場合に、強制的に孤独にさせられた場合よりも顕著にネガティブな反応を低下させるだろう。」を検証した。これらはそれぞれ、性格特性とシナリオ（場面）との交互作用効果を予測するものであったが、実験の結果、交互作用効果はみられなかった。そこで、シナリオ別・対人疎外感と拒否不安の高低・ポジティブ反応感情とネガティブ反応感情得点の相関分析を行ったところ、性格特性と感情反応との関連が低いことも明らかとなった。これらの結果は、個々の性格がどうであれ、その人がどういう状況にあるかという状況要因が感情反応に強く影響することを示している。したがって、その人を取り巻く状況が、心理状態を左右して、自殺に結びつく可能性が示唆されるだろう。

本研究では、実験参加者には 3 人で行う課題を想起させ、自発的に孤独になって課題を進める、強制的に孤独になって課題を進めるという 2 つの状況において、考えられる気分の度合いを聞いた。他者が 2 人だけという状況は孤独を選ぶという意味でも、孤独にさせられるという意味でも、「孤独である」という状況が明白ではなく、実験操作として適切ではなかった可能性がある。3 人という人数を増やすと結果がよ

り明白になったのではないかと考えられうる。

相関分析の結果から強制的孤独のネガティブ反応と対人疎外感尺度が相関し、対人疎外感尺度と親和動機尺度（拒否不安）も相関することが示された。親和動機尺度（拒否不安）と同様に、対人疎外感尺度も強制的孤独にさせられた状況に敏感に反応する性格特性を反映していた可能性がある。したがって今後は、一人でもいいと思いやすい個人差を測定する、別な性格特性尺度を用いて実験する必要があるであろう。

本研究では The Positive and Negative Affect Schedule[PANAS]（川人，2011）の20項目のうち「活気のある」「熱狂した」「興味がある」を除いた17項目を用いた。そして、「神経質な」「機敏な」「注意深い」をダミー項目とした。さらに、ポジティブ反応、ネガティブ反応、それぞれに関して、2つのシナリオそれぞれでの値を用いた因子分析（最尤法，プロクラステス）を行った。結果はあまり一貫しなかったが解釈の容易さを考慮し、ポジティブに関しては「誇らしい」「興奮した」「強気な」「決心した」「やる気が湧いた」の項目の平均値、ネガティブ反応に関しては「恐れた」「苦悩した」「怯えた」「うろたえた」「恥づかしい」の項目の平均値を用いることにした。この時、ポジティブ反応とネガティブ反応をシナリオで相関分析したところ、自発的孤独のポジティブ反応とネガティブ反応では、 $p=.003$ であった。また、強制的孤独のポジティブ反応とネガティブ反応では、 $p=-.012$ であった。ポジティブ反応とネガティブ反応は負の相関を示すと予測されたが、結果はそれを支持しなかった。従って、本研究の目的である「孤独に関する個人差特性が、孤独を生み出す状況によって、どういう反応を引き起こすか」を、明らかにするために、より適切に気分を測定する方法を用いる必要があるだろう。例えば、孤独になった時に想起する感情（寂しい、情けない、虚しい、憂鬱）を採用することで、より適切に反応を測定できた可能性がある

自発的孤独の状況で、疎外感が低まるとネガティブが低まり、ポジティブは高まると予測したが、結果は、予測通りの相関パターンはみられなかった。これは、そもそも性格特性で対人的疎外感尺度を用いることが適切ではなかった可能性を示している。今後、うつ尺度の相関分析などから、妥当な性格特性を特定して、分析することが求められる。

引用文献

- ・清水裕士（2016）. フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- ・『自殺論』（Émile Durkheim 宮島喬訳 1985）
- ・『自殺の心理学』（高橋祥友）
- ・平成27年度 自殺対策白書（内閣府）
<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/16/index.html>
2017年2月14日
- ・自殺死亡者数（警察庁）
https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H28_tukibetu/jisatushasuu_zanteichi.pdf 2017年2月14日
- ・心理測定尺度集Ⅲ
- ・21年間の調査からみた大学生の自殺の特徴と危険因子（内田，2010）
- ・親和動機尺度（拒否不安）（杉浦，2000）
- ・対人的疎外感尺度（杉浦，2000）
- ・大学生における「ひとりの時間」と孤独感・対人恐怖心性との関連（海野ら，2010）
- ・An Inventory for Measuring Depression (A. T. BECK, M.D.; C. H. WARD, M.D.; M. MENDELSON, M.D.; J. MOCK, M.D.; J. ERBAUGH, M.D)
- ・Beck Depression Inventory (1978年版) の検討と Depression と Self-efficacy との関連についての一考察（林 潔・瀧本 孝雄）